村木先生と学問

井上　和子

今から約35年前の1963年 4月から村木先生と私は国際基督教大学 (ICU) での大学教師としての生活をはじめました。その後ICUの語学科の他の先生方と共に、私たちは1985年に私が退職するまで、研究と教育の喜びと苦労を分かち合って来ました。さらに、今年を入れて 5 年間、この大学で新しい大学院を軌道に乗せるために、村木先生には種々お骨折りをいただきました。

私たちがこうしてスタートラインについた時、村木先生はICUの大学院で修士号を取られたばかり、私はミシガン大学の大学院に提出する博士論文を執筆中でした。ICUでは当時ヨーロッパとアメリカ出身の著名な言語学者が教授として教鞭を取っていました。これらの先生方はいずれも構造主義言語学の大家でしたから、村木先生は当時の日本の他の大学では得られなかった正統派言語学の訓練を受けられた訳です。当時、日本では言語学というと、古典語の研究か、あまり知られていない言語の研究の意味に取られました。国語学、英語学、フランス語学、ドイツ語学など個別言語の研究は言語学とは考えられていなかった時代です。

他方、私がミシガン大学で修士号を貰った1958年の頃は、構造主義言語学の最盛期でしたから、私もその方向での訓練を受けましたが、博士課程に入ってから、問題を感じ、生成文法に解決の糸口を見つけたところでした。1964年に提出した博士論文も生成文法理論に沿ったものでしたが、今考えるとこの理論の真髄に迫ることなどとてもできなかった代物です。

幸いなことに、この時期にICUでは、言語学の専攻課程を開く計画が持ち上がり、私たちもカリキュラムの策定に加わることができました。村木先生も私も若手研究者というには年を取りすぎていましたが、若手教師 (junior faculty) として自由闊達な議論を交わすことが許されました。確か1966年にこの課程が発足しましたが、当時は今のように情報化が進んでいなかったので、欧米諸国で発表された論文を手に入れることが難しく、少ない資料を基に互いに議論を戦わせながら、理論を理解するのが精いっぱいでした。そんな中で村木先生は幸運にも1967年にフルブラ

イト奨学生として、テキサス大学に留学され、博士号を取得されました。

1970年に帰国された後の村木先生は多くの大学院生に囲まれ、研究を充実させていかれました。特に、当時日本ではあまり研究が進んでいなかった意味論の研究にパイオニア的な役割を果たされました。言語学の大先輩である太田朗先生が1983年に『否定の意味』に関する研究で学士院賞を受けられましたが、その書評を誰に頼むかということである学会で議論したことがあります。その時村木先生をおいて他に適任者がいないということに意見が一致したのも、先生のこの分野での業績が認められていたからです。

1983年には日本英語学会が発足しました。長年日本英文学会の一翼を担って英語学分野も発展して来ましたが、この時ようやく独立する機運にめぐまれたのです。従って、設立に関わった人々は、並々ならぬ覚悟をもって事に当たりました。中でも学会誌の質が学会の将来を決定するというので、編集委員を厳選しました。この中に村木先生が入られたことも、先生の学問分野での貢献の大きさを示しています。

ICUでは、すでに60年代の初めから、毎年夏期言語学研究会を開いていて、研究論文の発表だけではなく、国外からの研究者による講演などをも組み入れていました。現在本学の大学院でも国外からの研究者の講演や研究発表が相次いでおり、1960年代後半から85年までのICUとよく似た学問的風土が出来上がりつつあります。村木先生はこれらの研究会の実行委員長や、研究論文集の編集委員長などを何度も引き受けておられました。そんな関係で、今でも本学に訪ねて来る外国の方の中に村木先生の消息を聞いたり、先生にまつわる面白い話をする方々がおられます。そんな話の一つに「村木先生の車に乗せて貰ってとても恐かった」ということばがあります。私たちも、運転免許をお取りになったばかりの頃は、先生の車に乗せて頂くのを躊躇したものです。私の運転についても全く同じ感想をもらす外国からの客人がいたようです。これは、とりもなおさず、私たちがいつも言語関係の研究会の計画から、招待講演の手はず、講演者の接待に至るまで、大学院生と一緒になって走り回っていた証拠と言ってよいでしょう。

1980年の初めから日本の言語学界に外部からのインパクトが現れ始めました。その一つは、1982年の国際言語学者会議です。この会議は、日本の言語学研究の水準の高さを世界に示すよい機会になったのですが、村木先生も運営委員として論文審

査その他で活躍されました。続いて、1983年から2年間私が日本言語学会の会長を勤めた折りにも、村木先生は事務局長としての重責を果たして下さいました。

このように息をつく暇もないほど学会関係の仕事に忙殺されておられた間にも、着々と独創的な論文を発表してこられました。現在の生成文法についても、一歩距離を置いたところで鋭い鑑識眼をもって評価しておられます。言語資料についても確固たる信念をもって判断されます。私なども、資料の解釈について先生を説得するのに骨が折れたこともありましたし、先生の判断のお陰で正しい解法が見つかった経験もあります。そんな意味で村木先生の学恩を一番多く受けたのは私だったのではないかと思います。

他方、村木先生は穏やかで謙虚な学者でいらっしゃいます。ご家庭でも実によいご主人であり、ご父君でもいらっしゃいます。未だ東西のドイツが合併していなかった今から10年前に東ベルリンで国際言語学者会議があり、先生は奥様を同伴して参加されました。会議後の旅行で、ポツダム、マイセン、ドレスデンなどを訪ねましたが、奥様主導の観光ぶりに一同羨ましく思ったことです。ご退職後も温かいご家庭でご研究に没頭なさることと存じます。どうかいつまでもお元気で、私たちをも末永くご指導下さいますようお願いいたします。

1997年12月17日